

チャペル週報

No. 6

2013.5.14～5.18

春季宗教運動特集号

しかし、あなたがたの間では、そうではない。
あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕え
る者になり、いちばん上になりたい者は、すべ
ての人の僕になりなさい。

(マルコによる福音書10:43-44)



西宮聖和キャンパス ダッドレーメモリアルチャペル

関西学院宗教センター

☆チャペル・スケジュール☆

時間 10:35～11:05 場所 各学部チャペル

5月13日(月) 神 谷 内 由 季 (神学部2年)
 経 舟 木 讓 (宗教主事)
 人 小 西 砂千夫 (人間福祉学部教授)
 聖和 聖書物語「ささげもの」

5月14日(火) 大学合同チャペル「総主題：建学の精神」10:20～11:20

西宮上ヶ原キャンパス 会場：B号館101号教室
 「メアリー・ランバス『世界市民』としての生き方」 Ruth M. Grubel (院長)
 西宮上ヶ原キャンパス 会場：G号館IS棟303号教室
 「グローバル社会と“世界市民”」 平 林 孝 裕 (国際学部宗教主事)
 西宮聖和キャンパス 会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
 「ペスタロッツと信仰」 土 井 健 司 (神学部長)
 神戸三田キャンパス 会場：VI号館101号教室
 「関学で、人間を磨こう」 村 瀬 義 史 (総合政策学部宗教主事)

5月15日(水) 大学合同チャペル「総主題：建学の精神」10:20～11:20

西宮上ヶ原キャンパス 会場：B号館101号教室
 「泥かぶる人生」 舟 木 讓 (大学宗教主事)
 西宮上ヶ原キャンパス 会場：G号館IS棟303号教室
 「建学の精神」にみる「関学らしさ」—スクールモットーを軸に— 井上琢智(学長)
 西宮聖和キャンパス 会場：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
 「仕える」 日 浦 直 美 (教育学部長)
 神戸三田キャンパス 会場：VI号館101号教室
 「メアリー・ランバス『世界市民』としての生き方」 Ruth M. Grubel (院長)

5月16日(木) 神 小 西 清 信 (神学研究科M1)

文 岩 野 祐 介 (神学部准教授)
 社 卒業生からのメッセージ 林 功 (社会学部卒業生)
 法 災害復興支援活動について (1) 杉 浦 健 (ヒューマンサービスセンター)
 経 「経済と人間②」 山 鹿 久 木 (経済学部教授)
 商 音楽チャペル ゴスペルクワイアP.O.V.
 国 English Chapel 吉 村 祥 子 (国際学部教授)
 聖和 「『風・空気・息』—パイプオルガンの響きを通して—」 高 田 正 久 (聖和短期大学教授)
 総 大 村 克 己 (神戸三田キャンパス事務室職員)

5月17日(金) 神 <アジア・エキュメニカル礼拝>

文 English Chapel Andreas Rusterholz (宗教主事)
 経 「経済と人間③」 井 口 泰 (経済学部教授)
 人 木 原 桂 二 (北山バプテスト教会牧師)
 聖和 「忘れること、おぼえること」 岩 坂 二 規 (教育学部准教授)
 理 音楽チャペル 聖歌隊

◇ランバス早天祈祷会 8:20～8:40 ランバス記念礼拝堂 (上ヶ原)
 5月14日(火) 宗教運動のために 杉 山 直 人 (宗教活動委員会委員長)
 5月17日(金) ペンテコステ(5/19)を迎えるにあたって 打 樋 啓 史 (社会学部宗教主事)

Mary Lambuth, “Faithful Missionary and Dauntless Soul”

Ruth M. Grubel

The founder of Kwansei Gakuin, Walter R. Lambuth became known as a “World Citizen,” but his parents were also active missionaries for most of their lives. His mother, Mary Isabella McClellan Lambuth was an extraordinary woman, even by today’s standards. Born into a wealthy family in the state of New York (USA), she was a close relative of President Cleveland. However, there was a big fire at her father’s business, and he lost much of his income, so his remaining wealth was used to educate the children to ensure their future. Mary was trained as a teacher, and at the age of 19, she decided to move to Mississippi where her sister was living. There, she got a job as a tutor for the Lambuth family, which included sixteen children! James, one of the oldest children was already a university student, but when he decided that he would go abroad as a missionary, he must have been deeply impressed by the young woman who offered herself and five dollars for world missions at a church meeting. Mary was the young woman, and soon the couple was married and on their way to China from New York harbor. The journey took nearly half a year, and Mary was pregnant with Walter who would be born soon after they arrived in Shanghai. Later, the family moved to Japan, and Mary would be instrumental in the efforts that would become Palmore Institute, Keimei, and even one of the schools that merged into Seiwa College.

(院長)

グローバル社会と“世界市民”

平 林 孝 裕

「世界市民」との表現をもって関西学院の一つの精神・理想が示されています。これと同様の表現で「グローバル市民」「地球市民」もあります。これらの表現の意味の差異が明瞭でなければ、本学の在り方を示す言葉として用いるには慎重であるべきでしょう。周知のように「世界市民」との言葉は、パールリバー教会にあるランバス宣教師の記念碑から採られました。この言葉とともに、日本のみならず広く四大陸で活躍したランバスの生涯が想起されます。まさに世界的な活動です。しかし地理的な広がりだけが、「世界」との言葉に込められた意味なのでしょうか。ランバスを送り出した米国南メソジスト監督教会はその起源をジョン・ウェスレーにさかのぼることができます。ウェスレーは、「世界はわが教区なり」(I look upon all the world as my parish)という有名な一句を日誌に記しました。世界は教区、つまり自分の仕事場、責任のある場所という認識です。ランバスの働きが世界規模となったのも、この言葉と同じ責任感があったからではないか。こう考えると「世界市民たれ」との標語は、そのような責任への誘いに思えてならないのです。

(国際学部宗教主事)

ペスタロッチと信仰

土 井 健 司

建学の精神をひろく考えると、他者に仕えることだといえます。これまで他者に仕えた人は数え切れないほどいるわけですが、ペスタロッチもその一人です。

ペスタロッチは19世紀前後に活躍したスイスの教育者です。若いときに著した『隠者の夕暮れ』はかれの教育における信念などがつづられた小著です。ノイホーフでの事業が失敗したときにもなお彼は教育への情熱を失わず、そのマニフェストと言うべきものを書いたのです。

そのなかでかれが強調するのが人間の子心ということです。たとえば啓蒙期の思想家として人間の平等を説きますが、ペスタロッチは「子である」ということにすべて

の人間の共通性を認めました。つまり誰もがかつては「子ども」であった。子どもでなかった人はいないのです。そして子どものときに得た親にたいする信頼感、その究極が神への信仰に他ならないといえます。

ペスタロッチは貧しい家の子ども、親を失った子どもをとくにかわいがり、親のように接したといえます。たとえば『シュタンツ便り』にはその様子がありのままに記されています。子どもであるという安心感、親への信頼感を満足に得ることができない子どもに自ら親のように接してその子心を涵養しようとしたといえます。今の時代、こうしたペスタロッチにわれわれが学ぶものも多いと思います。

(神学部長)

関学で、人間を磨こう

村 瀬 義 史

関学が、キリスト教学やチャペルなどキリスト教に接する機会を大切にしているのは、とりもなおさず、本気で世界市民を育もうとする姿勢の現れである、と私は思う。

学則が言う「キリスト教主義に基づく人格の陶冶」とは多義的だが、通底していることはおそらく、知識や技術の面だけでなく、学生の人間としての成長そのものに関心を持っているということだろう。だからこそキャンパスの雰囲気は、ロボットを造る工場のようなよりも人が育まれる牧場のようであり、学生の自主性の発揮を歓迎する文化があり、そして「何を身につけるか」ということだけでなく、「どういう人間になるか」ということを問いかけ、考えさせる“しかけ”が、学内に様々な形で設けられているのだ。多くの学生にとっては「異文化」であるキリスト教との出会いもその一つである。

学生時代に、時代や国境を越えて世界に広がるキリスト教と向き合うことは実に貴重である。それは決して、特定の考え方に染まるためではない。世界的なもの・普遍的なものとの対話の中で、あなた自身の内に、あなた固有の、しかも世界で通用するような価値観や生き方を創造するためなのだ。あたたかい小さな村のような一面をもつ神戸三田キャンパスは、ヒューマンな出会いと成長の可能性に満ちている。関学で、人間を磨こう。せっかく、関学に入学したのだから。

(総合政策学部宗教主事)

関学の香り　　―泥かぶる人生―

舟　　木　　　　　　譲

華やかな表舞台で多くの人に認められ活躍することや、富や権力を手中にし、それらを自由に行使する人生は多くの人を魅了するかもしれません。そしてそれに向かって全身全霊を傾けて努力することは尊いことです。

しかし「そうしたことだけ」が目的になったとき、人は「的外れ」な人生を送ることになると思われます。私たちが周りを丁寧に見渡せば、その存在が真に有難いものと感じられる人は、誰しもが嫌がる他人の失敗の後始末や、自分の時間が無為に消えてしまう誰もが厭う事態を引き受ける人であり、また自らのつとめに黙々とただただ誠実に関わる人であることに気づかされます。

関学が創立以来大切にしてきたのはそのように、自らの人生や仕事あるいは自らが関わった人たちへの「無償の誠実さ」であり、それ故にその歩みの中で独自の香りを立ち上げています。その香りは、それに触れた人誰しもがほっとする、あるいはいなくなって初めてわかる人から立ち上るものだと言えます。そしてその源泉は、何よりもキリスト教の原点であるイエスの存在にあります。なぜならイエスの存在の本当の意味と本質は、十字架で亡くなってからよりいっそう立ち香り、多くの人の希望と慰めそして力となってきたのですから。

(大学宗教主事)

「建学の精神」にみる「関学らしさ」 ―スクールモットーを軸に―

井　　上　　琢　　智

関西学院の「建学の精神」は、と尋ねられて“Mastery for Service”と答える人は少なくありません。それほどこのことばは関西学院につらなる人びとにとっては「キリスト教主義」という「建学の精神」を示すものとして現在の私たちに浸透しています。ところで、皆さんは次のことばがどの学校の建学の精神なりスクール・

モットーなのか分かりますか。「独立自尊」、「学問の独立」、「自由と清新」・「平和と民主主義」、「正義と自由」、「自由と進歩」、「個人の自由の尊重と実証的・合理主義の学風」、「権利自由」・「独立自治」、「キリスト教精神に基づく『良心』」、「キリスト教に基づく人間教育」、「キリスト教信仰にもとづく人間教育」、「キリスト教精神を基底とし、真実と価値を求めて、人間形成」、「神と人^{うんのう}とに奉仕する」、「国家の須要に応ずる學術技芸を教授し及其^{うんのう}蘊奥を攻究するを以て目的とす」などです。平和、自由、正義、権利、権力、国家などの政治学上の用語や、人間、真実、価値、進歩など哲学上の用語が多用される一方、キリスト教、神、信仰など、宗教上の用語も用いられています。あなたは、これらから「関学らしさ」をどのように発見されますか。ともに考えてみませんか。

(学 長)

仕える

日 浦 直 美

“I give five dollars and myself”（「私は、この5ドルと私自身を献げます」）。これは、関西学院の創設者、W.R.ランバスの母、メアリー・イザベラ・ランバスが、10代の若き日に、中国での宣教のアピールがなされた集会で発したと伝えられている言葉です。建学の精神を想う時、創設者W.R.ランバスと彼を支えたランバス・ファミリーの生き方の根底に、神と人に「仕える」という共通の精神があることに気づかされます。私達は何のために生き、生かされているのでしょうか。「私自身を捧げます」という少女メアリーの言葉は、自分の生活のためだけに学び、働くこと以外の人生があることを教えてください。「知識を求めるのは、単に知識のために求めるのではなく、まして名誉のためではなくて、人類に対してより良き務めをなすことができるものとして、自らに備えんがため、これをなすような者でなければならない。」「主であれ、人であれ、而して仕えるために」という第4代院長、C.J.L.ベーツの言葉と共に、学院創設時の建学の精神を改めて心に刻みたいと思います。

(教育学部長)

●人権教育研究室研究部会公開研究会のご案内

「関学の中のセクシュアルマイノリティ：すべての人が自分らしく振る舞える学びの共同体を目指して」

と き：5月17日(金) 15:15～18:00

ところ：関西学院大学図書館 図書館ホール

司 会：武田 丈（人権教育研究室研究員・人間福祉学部教授）

内 容：1990年代以降、セクシュアルマイノリティの人権への注目が社会的にも高まり、関西学院大学も学内の人権講演会や研究会で取り上げてきました。今回のシンポジウムでは、セクシュアルマイノリティの関学の現役生および卒業生に登壇してもらい、関西学院において登壇者が体験したこと、思ったことを語っていただき、それをベースに関西学院が誰にとっても自分らしく振る舞えるラーニングコミュニティ（学びの共同体）になるための方策を議論していきます。

〈あわせて、セクシュアルマイノリティのカップルの普段の生活を紹介するため、図書館エントランスホールにて5月13日(月)から17日(金)まで写真展を開催します。また、多様な性についての基礎知識に加え、当事者や家族の声を盛り込んだ「いのちリスペクト：ホワイトリボン・キャンペーン」(<http://ameblo.jp/respectwhiteribbon/entry-11440462193.html>)のパネル展も同時開催します〉

●ランバスチャペル・ヌーンコンサート

西宮上ヶ原キャンパスの正門に入って右手に見えるチャペル「ランバス記念礼拝堂」では、礼拝はもちろん、コンサートや式典、講演会、卒業生の結婚式などが行われています。5月に入ると、関学を代表する音楽団体による恒例のヌーンコンサートが開かれます。お昼休みのひととき、どうぞ耳を傾けてみてください。

5月16日(木) 関西学院大学混声合唱団エゴラド

5月30日(木) 関西学院バロックアンサンブル

6月3日(月) 関西学院大学応援団総部吹奏楽部

6月4日(火) 関西学院交響楽団管楽アンサンブル

6月6日(木) 関西学院聖歌隊

6月10日(月) 関西学院交響楽団弦楽アンサンブル

6月13日(木) 関西学院ゴスペルクワイアPower Of Voice

いずれも12:50～13:20

ところ：ランバス記念礼拝堂（西宮上ヶ原キャンパス）

主 催：宗教センター・宗教音楽委員会

●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アブロースタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎週金曜日にチャペルアワーを開催しています。（18:00～18:20 1405教室）

5月17日(金) 田淵 結（教育学部宗教主事、宗教総主事）

5月24日(金) 舟木 譲（経済学部宗教主事、大学宗教主事）

5月31日(金) Andreas Rusterholz（文学部宗教主事）

●CD・DVDライブラリー

吉岡記念館事務室宗教センターには、教会音楽、キリスト教に関するCDやDVDを備えています。本学学生及び教職員（学生証または身分証明書必要）であればどなたでも利用できますので、希望者は事務室までお越しください。

●使用済み切手収集にご協力ください

本学では日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）切手部の活動に協力し、使用済み切手の収集をしています。通常切手も対象としていますのでどうぞ吉岡記念館常設の回収箱にお届けください。